

ハンガリーの幼稚園・小学校の音楽教育における 伝承の歌遊びの意義

尾 見 敦 子*

How Traditional Singing Games are Considered to be Significant for Kindergartens and Elementary School Music Education in Hungary

Atsuko OMI

要 旨

本稿の目的は、ハンガリーの幼稚園・小学校の音楽教育において伝承の歌遊び（わらべうた遊び）がどのような意義づけを与えられているかを、幼稚園と小学校の「国家基準カリキュラム」をもとに明らかにし、合わせて幼稚園と小学校の具体的な実践事例においてそれがどのように実現されているかを検証することである。

ハンガリーの幼稚園の教育課程において伝承の歌遊びは、第一に音楽の協同性の喜びをもたらし、第二に音楽的能力を伸ばし、第三に「伝統の認識と伝承」につながるものとして意義づけられている。伝承の歌遊びを基にする音楽教育は「幼児の多面的な調和のとれた人格の発達」を促すという幼稚園教育の目的に向かって営まれている。

伝承の歌遊びは幼稚園教育では中心的な教材である。幼小接続期には、歌遊び自体が音楽活動として重視される。小学校以降は歌遊びの「遊び」の側面を教授法的に活用しつつ、歌遊びの「音楽」的側面に注目するようになる。教材の音楽様式は歌遊びから徐々に民謡へと移行する。

ハンガリーの小学校音楽科の発達目標は「音楽の再創造」と「音楽の受容」である。歌遊びは身体の動きを通した音楽的体験であり、楽器に抛らず声を合わせ、聴き合うことを促す。幼稚園における音楽的喜びに満ちた歌遊びの経験は、音楽を「再創造」し「受容」する土台を育てていると言える。このようにして、伝承の歌遊びは、音楽教育における「幼小接続」の理念と実践の双方を繋いでいる。

第3章では筆者が参観した幼稚園の45歳児の音楽指導と、小学校1年生の入学当初の音楽授業の事例を分析し、歌遊びが幼児や児童の音楽的能力を伸長や人間的成長を促すことを具体的に示した。

（本研究はJSPS科研費26381225の助成を受けた。）

キーワード：伝承の歌遊び、音楽教育（幼稚園・小学校）、ハンガリー、国家基準カリキュラム

*教授 音楽教育学

1. はじめに

本稿の目的は、ハンガリーの幼稚園・小学校の音楽教育において伝承の歌遊び（わらべうた遊び）がどのような意義づけを与えられているかを、幼稚園と小学校のナショナル・カリキュラムをもとに明らかにし、合わせて幼稚園と小学校の具体的な実践事例においてそれがどのように実現されているかを検証することである。

わらべうたは、言葉・音楽・声・しぐさや動き・スキンシップが一体となった、子どもの生活の中にある遊びである。英語では singing games（歌を伴った遊び）、nursery rhymes（韻律のある言葉）と言う。わらべうたで遊ぶと「人とつながる楽しさ」が生まれる。歌い遊ぶと感情の交流を通して信頼関係が生まれ、共感力や連帯感が育つ。わらべうたは、歩く・揺れる・跳ぶ・回るなど全身を使う粗大運動から手合わせ、指遊びなどの微細運動、前後・左右・上下・表裏等の「動きの対」を含むので、遊びを通して身体感覚や空間認知が育つ。歌詞は日本語の自然で心地よいリズムと抑揚に拠っており、擬音語・擬態語が多く言葉の韻律が豊かで、子どもの母語の音韻構造や語彙を育てる。数や自然、動・植物、気象・天体気候をテーマにした歌は環境に対する認識を育てる。歌うことは健康を増進させ、能動的な音楽性を培う。このような多面的な教育的価値を有するわらべうた遊びは、ハンガリーでは幼稚園と小学校低学年の音楽教育実践で重視され、その背後にナショナル・カリキュラムにおける明確な規定がある。以下に具体的に述べていく。

2. ハンガリーの国家基準カリキュラムにおける伝承の歌遊びの位置づけ

2.1 国家基準カリキュラムにおける音楽教育の理念

ーコダーイ・ゾルターンの音楽教育哲学ー

ハンガリーでは、幼稚園から初等中等教育を通して自国の文化、伝統、母語に深く根ざした教育が行われている。音楽教育は「幼小接続」しており、幼稚園では「ハンガリーのわらべうた、歌遊び、唱え言葉」を、小学校では、幼稚園教育を基礎として、「ハンガリーのわらべうた、民謡、器楽曲、民俗舞踊」「他国の民俗音楽」「普遍的な芸術音楽作品」に至る¹。幼稚園²の教育課程は「幼稚園教育国家基準プログラム（Az óvodai nevelés országos alapprogramja）」（2012年）、初等中等教育³については「国家基準カリキュラム（Nemzeti alaptanterv）」（2012年）という。

ハンガリーの音楽教育は、作曲家・民族音楽学者・音楽教育家、コダーイ・ゾルターン⁴

(Kodály Zoltán, 1882–1967) が提唱した理念 (コダーイ・コンセプト) に基づいている。コダーイの死後、半世紀、体制転換後から四半世紀が過ぎても変わることなく継承されている。初等中等教育の「国家基準プログラム」(2012 年) には次のように書かれている。

音楽教育の基礎となるのはコダーイ・コンセプトで構築された音楽教育の実践であり、これはすなわち全き人間へ成長させる教育学であり、その中心には、ヨーロッパ人としての教養を備え、ハンガリー民族の伝統を守り伝え、開かれた心を持ち、創造的なそして共同体の一員となる教育がある。
(「音楽科の基本理念と目標」下線は引用者)

「音楽を通して全き人間へ成長させる」という理念は、公教育における音楽教育の存在理由を明解に示している。幼稚園教育において自国の音楽表現 (音楽的母語) を自然に身につけるということが、初等中等教育以降の「ハンガリー民族の伝統」から「ヨーロッパ人としての教養」へと発展する学習を基礎づけている。そして、「開かれた心を持ち、創造的なそして共同体の一員となる教育」という文言は、「キー・コンピテンシー (Key Competency)」によって構成される EU 先進諸国の教育課程と調和している。

コダーイは音楽教育に関する膨大な文章を遺したが、それらは『回顧録 (Visszatekintés 1–3)』(全 3 巻、ハンガリー語、Argumentum, 2007 年) に収集されている。コダーイの音楽教育哲学は体系的で壮大である。発達段階に照らした音楽の教育内容の順序性が明確である。コダーイの研究家、高橋美智子は、『回顧録』から丹念に言葉を集めて再構成することで、コダーイの音楽教育哲学の体系を一望できる図に表した。図中の言葉は高橋による翻訳である (図 1)。

コダーイは「人間教育の究極目的」は「地球人類の平和の実現」にあり、学校教育すなわち公教育における音楽教育によってこの目的に達成することができると考えた。高橋は、円の中心に「究極目的」を、円周上に目的実現のための柱立てを配置し、柱立てをナンバリングすることで、コダーイの音楽教育哲学の体系性を図式化している。本図は、コダーイの音楽教育哲学の壮大な全容、すなわち、目的・方法・手段の関係、個々の柱立ての構成や詳細を一目で把握できるものとして注目される。わが国では、コダーイの音楽教育について、この図の「Ⅶ. 教授論」の「方法・手段」に挙げられた「ハンドサイン唱」や「楽譜の読み書き」に矮小化した紹介が散見される。しかし、コダーイの音楽教育哲学の真価は、理念と教育課程・教授法の総体を体系的・系統的・具体的に示していることにある。

コダーイは、民俗音楽から芸術音楽へ、中欧に位置するハンガリーからその周辺諸国、そして西欧、欧州全体へという順序性と系統性を備えた音楽教育の教育課程を構想し、教育課程の実現のための具体的な教材を学問的な裏付けを伴って準備した。図中、「Ⅳ. 教材論と教育課程」は 6 段階から成るが、その第一段階におかれた「ハンガリーの伝承遊び」が、本稿で言う

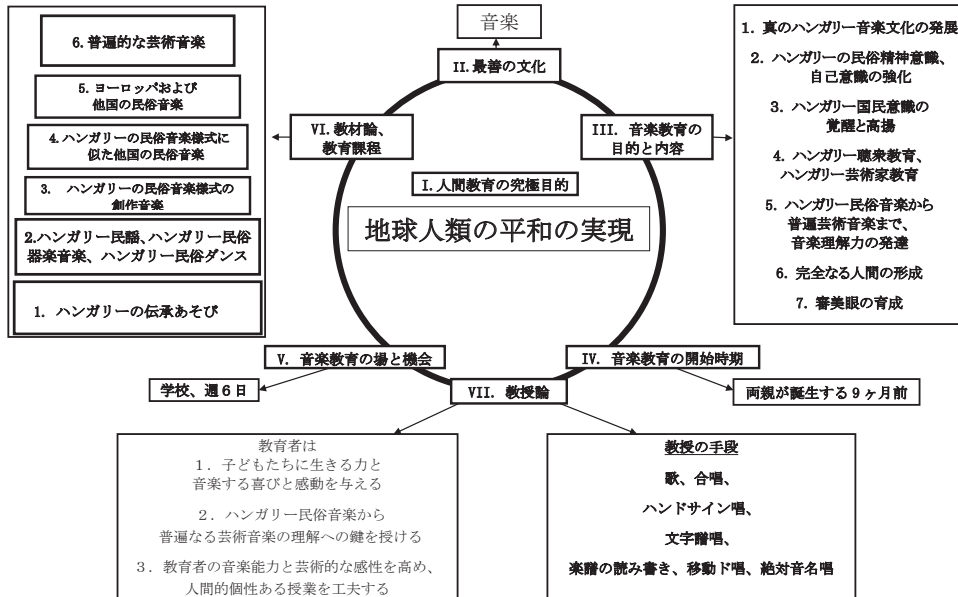


図1 コダーイの音楽教育哲学の体系図（高橋美智子）

ところの「伝承の歌遊び」である。「伝承の歌遊び」は子どもの「民俗音楽」である。この図が示すように、伝承の歌遊びは「6. 世界の普遍的な芸術音楽」に至るまでの出発点に位置付けられている。

2.2 幼稚園教育における伝承の歌遊びの意義

「幼稚園教育のハンガリー国家基準プログラム」は、「I. 序文 II. 子ども像・幼稚園像 III. 幼稚園教育の課題 IV. 幼稚園生活を組織するための原則 V. 幼稚園生活の活動形態と教師の課題 VI. 幼児期の終わりの発達の特徴」の6章から成っている。各幼稚園の教育プログラムは、この国家基準プログラムに準拠し認可された教育プログラムを利用するか、本プログラムに適合した独自の教育プログラムを作成する（第I章より）。

全体を俯瞰するために、以下、各章から抜粋して引用・訳出する（下線は筆者）。

第I章ではまず、幼稚園教育の基本原則を決定するために基とする3点を述べている。

- 子どもは、発達する人格として、愛情ある世話と特別な保護がふさわしい。
- 子どもの教育は第一に家庭に権利と義務があり、これを幼稚園が補い、場合により不利な条件を

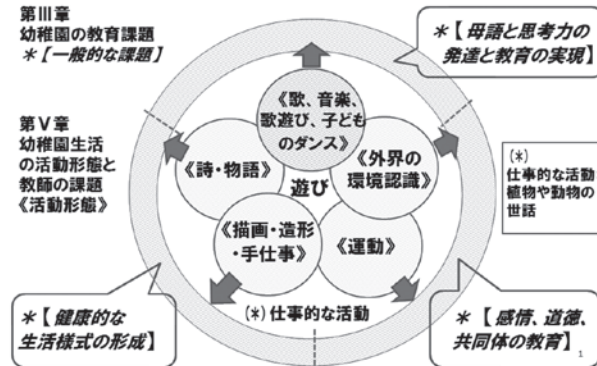


図2 幼稚園のナショナルカリキュラム（2012）における音楽の位置づけ
（ハンガリー「幼稚園教育の国家基準プログラム」より、訳と作図：尾見）

軽減する役割を担う。

- c) 幼稚園における教育は全ての子どもが平等に高水準の教育にあずかれるように、人権と子どもに該当する権利を尊重し、子どもの人格の完全な成長の援助に向かわなければならない。

第II章では、子どもと幼稚園についての基本的な考え方を述べている。

〔子ども像〕子どもは発達する人格であり、発達には、遺伝的素質、成熟の固有の法則、自発的に或いは計画的に適用された環境の影響が相互に作用して決定される。

〔幼稚園像〕幼稚園における教育の目的は、年齢的、あるいは個人の特性、並びに異なる発達のテンポを顧慮しながら、幼児の多面的な調和のとれた発達や子どもの人格の発達を促し、不利な条件を軽減することである。

第III章では、幼稚園教育の一般的な課題は、「健康的な生活様式の形成」「感情・道徳・共同体の教育」「母語と思考力の発達と教育の実現」の3つであることを述べている。

第IV章は5項から成る。第3項「幼稚園生活の組織」から「良い日課」を引用する。

良い日課は、継続性と柔軟性が特徴である。遊びの特別な役割というもの念頭に置き、調和のとれた活動を構成することが大切である。日課と週課はクラスの教師が作成する。

第V章では、幼稚園生活の活動形態が6つ挙げられている。まず最初が「遊び」である。

遊びは、幼少期の最も重要で最も発達を促す活動であり、そのため幼稚園における教育の最も効果的な手段である。遊び、すなわち自由な連想が続く自由遊びの過程は、小さな子どもにとって基本的な心理的欲求であり、毎日繰り返され、長時間持続し、可能な限り妨げられることなく、満足を与えられるものでなければならない。小さな子どもは、外界とその子の内的世界から生ずるはつきりして

いない印象を遊びの中で明らかにする。このようにして遊びは、強調された意義のある方向性や精神と動き、人格全体を発達させ、経験を与える活動となる。

「遊び」に続き、5つの活動形態が規定されている。すなわち「詩・物語」「歌・音楽・歌遊び・子どものダンス」「描画・造形・手仕事」「運動」「外界の環境認識」である。植物や動物の世話など「仕事の活動」も園生活の活動形態に含まれる。幼稚園教育の一般的な課題はこれらの活動を通して実現される。

第Ⅵ章では、「就学のための成熟度」が身体的、精神的、社会的成熟の観点から示される。

図2は、幼稚園教育における3つの一般的な課題（第Ⅲ章）が、「遊び」と5つの活動形態、および「仕事の活動」（第Ⅴ章）を通して実現されることを図示したものである。

音楽活動は《歌、音楽、歌遊び、子どものダンス》と名付けられ、子どもにとって音楽の自然なありかたを総合したものとなっていることに注目したい。また、音楽と《描画・造形・手仕事》は独立している。《詩・物語》は、以下の記述から、音楽と言葉の関係を意識的にとらえていることがわかる（下線は筆者）。

- 多くの場合、遊戯的な動作と結びつけた唱えやハミング、詩は子どもの情緒的安定や母語教育に貢献する。これらのリズムによって、動作と言葉は合一して子どもに感覚的・情緒的経験を提供する。
- 毎日の物語や、唱え言葉や詩を唱えることは、子どもの精神衛生のための確かな要素である。

詩や物語は、言葉の韻律やリズムという観点から音楽と関わり合う。とりわけ幼児において言葉と音楽と動きは密接な結びつきがある。《詩・物語》の活動は示唆に富んでいる。

《歌、音楽、歌遊び、子どものダンス》の内容を以下に全訳して示す（下線は筆者）。

1. 幼稚園では、周囲の音を注意して聞くことの、膝に乘せる遊びの、民族の子どもの歌の、歌唱の、歌遊びの、楽器を奏でることの喜びを提供し、同時に、音楽への興味を目覚めさせ、音楽を味わう感性や美的感受性を形成する。音楽経験を与えて、共通の音楽活動を通して、子どもがメロディ、リズム、動きの美しさと、一緒に歌うことの喜びを発見する。民謡の歌唱や聴取、子どもの民族ダンスや民族的な遊びは、伝統の認識と伝承を助ける。幼稚園における音楽教育の課題の効果的实现は、音楽的母語の形成を基礎づけ、促進させる。
2. 民族的な歌遊びや厳選された現代の作曲家の作品を歌うことが重要であるのは、それによって子どもの音楽的能力（拍、リズム感、歌唱力、聴取力、動き）や音楽的創造力が形成されるからである。
3. 音楽鑑賞の教材を選択するとき、「民族性の教育」の場合、保育者は子どもたちの民族的帰属を顧慮しなければならない。

4. 大人のモデルを自発的に模倣することにより，歌うことや演奏することが，子どもの日常の活動の一部となる。

図3は《歌，音楽，歌遊び，子どものダンス》の第1項，第2項の内容を図示したものである。

第1項はかなり入り組んだ文章であるが，図に表わすことで，何を，なぜ，どのように子どもに与えるのかが明確になり，第1項に体系的で深い内容が盛り込まれていることがわかる。以下，順に解説していく。子どもに何を経験させるのかを，外側にドーナツ状に配置した。どのように教授し，何を目標とするのかを①～④に示した。垂直方向に並ぶ矢印とナンバーは学習が深まっていく段階を表している。まず，「音楽の喜びの提供」があり，それが「音楽への興味を目覚めさせ」，子ども自らが「美しさ，喜びを発見」することへ導く。その結果として最終的に「音楽的母語の形成」がもたらされる。この順序性こそ，コダーイの音楽教育哲学が示す教授法の原則である。高橋の図（図1）には，「教育者は，子どもたちに生きる力と音楽する喜びと感動を与える」（「Ⅶ．教授論」）という文言が見られる。

「音楽の喜び」をもたらすものとして最初に挙げられている「膝に乗せる遊び」は，大人に一对一で遊んでもらい，歌ってもらう「遊ばせ遊び」である。「民族の子どもの歌」と「歌遊び」も「遊ばせ遊び」の場合を含んでいる。「楽器を奏でる」こと，「作曲家の作品を歌う」ことは子ども自身が奏でること，歌うことを意味している。第1項の第1文・第2文には，幼稚園で最初に一对一の「膝乗せ遊び」で大人に遊んでもらう喜びを味わった子どもが，やがて子ども同士の「共通の音楽活動を通して」「一緒に歌うことの喜びを発見する」ようになるという成長の道筋が描かれている。また，「音楽を味わう」段階から，「メロディ，リズム，動きの美しさ」段階から，「メロディ，リズム，動きの美しさ」

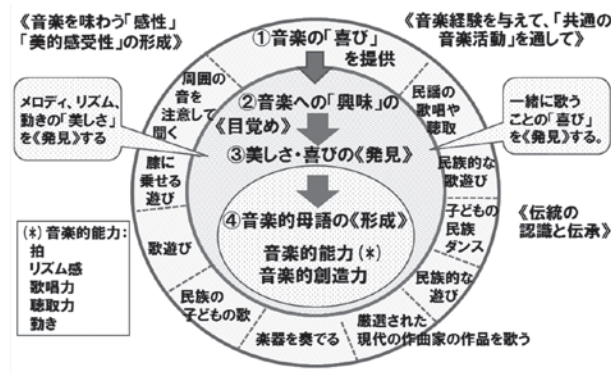


図3 《歌，音楽，歌遊び，子どものダンス》の構造
（ハンガリー「幼稚園教育の国家基準プログラム」（2012）より，訳と作図：尾見）

さ」を発見するという、もう1本の発達の道筋も描かれている。第2文には、「民族的な歌遊び」、すなわち伝承の歌遊びは、「子どもの音楽的能力（拍、リズム感、歌唱、聴取力、動き）や音楽的創造力」を形成するから重要なのだと明言されている（傍点は筆者）。ハンガリーの幼稚園教育の教育課程において、伝承の歌遊びは、第一に音楽の協同性の喜びをもたらし、第二に音楽的能力を伸ばし、第三に「伝統の認識と伝承」につながるものとして意義づけられており、伝承のわらべうたを基にする音楽教育は「幼児の多面的な調和のとれた人格の発達」を促すという幼稚園教育の目的に向かって営まれている。

2.3 初等教育課程における伝承の歌遊びの意義

12年制の初等中等教育の教育課程は、「国家基準カリキュラム（Nemzeti alaptanterv, 略称 Nat, 以下 Nat）」（2012年）と「カリキュラムの枠組（Kerettanterv, 以下「枠組」）」（2012年）から成る。「枠組」は、Natに示された各教科領域の基本理念と目的、及び各教科の基本理念と目的、発達目標⁵、および教育内容を、1-4年、5-8年、9-12年の教育期間の特徴に合わせて具体化したものである。

Natは冒頭で「公教育の課題は、基本的に、国民の教養、国内の各民族の文化の継承と保存、普遍的文化の仲介、倫理観と精神的・情緒的感受性を深めることである」と規定している（傍点は筆者）。子どもは民族の伝統文化や普遍的文化を学ぶことを通して教養を形成し、倫理観や感受性を深めていく。したがって、学校は児童・生徒に文化を「仲介」する役割を担っている。このように、「文化」は学校教育のキーワードである。音楽科もまた「公教育」の一翼として公教育の課題の実現をめざす。では、学校で音楽文化を教える（学ぶ）ことにどのような意義があると考え、また、音楽文化をどのようにとらえているのだろうか。まず、「芸術」の教科領域⁶の「基本理念と目的」にこう書かれている（下線は筆者）。

- 芸術を教えることには、民族的そしてヨーロッパとしてのアイデンティティの形成や、文化の伝統的な価値や今日の価値を知ることも含まれる。芸術的遺産と現代の芸術作品へ触れることによって、芸術教育は若者たちに対して、自分自身の時代の文化へ適応するための助けとなる。

「自分自身の時代の文化へ適応する」ために、文化の伝統的な価値や今日の価値を知る」ことが役立つ。そのために「芸術的遺産と現代の芸術作品へ触れ」ることが大切であると考えられていることがわかる。また、音楽科の「基本理念と目的」にはこう書かれている（下線は筆者）。

- 学校での音楽教育の主目的は、人生にわたって質の良い音楽を愛好させることであり、そうした音楽を知るための、そして体験をもたらし理解のための鍵を与えることである。

- ・音楽教育の基礎となるのはコダーイ・コンセプトで構築された音楽教育の実践であり、これはすなわち全き人間へ成長させる教育学であり、その中心には、ヨーロッパ人としての教養を備え、ハンガリー民族の伝統を守り伝え、開かれた心をもち、創造的なそして共同体の一員となる教育がある。

「質の良い音楽」の享受が生涯にわたって「全き人間」へと自己を成長させていく力となること、伝統の継承によって偏狭ではなく「開かれた心」と、模倣ではなく「創造性」を備えた共同体を形成できると考えられていることがわかる。このような理念の下で学校は子どもに音楽文化に出会わせるのである。

では、幼稚園における歌遊びの体験は、小学校教育にどのようなつながるのだろうか。

Natの音楽科の「教材」の項目に、1-4年で扱う伝統文化について以下の文言がある（下線は筆者）。

民謡、民族特有の子どもの遊び、平易な民謡編曲（推奨：コダーイ・ゾルターンおよびヤールダーニ・パール編曲によるわらべうた）。民族音楽の主題に基づく芸術的価値のある作品の抜粋（推奨：バルトーク『子どものために』コダーイ：『児童・女声合唱曲集』）、または正統的民族音楽。

幼稚園教育では伝統的歌遊びは中心的な教材であったが、小学校では教材の音楽様式は徐々に民謡へと移行していく。実際に、1-3年生の教科書を見ると、教材が歌遊び中心から民謡中心へ変化していくことがわかる（尾見 2012）。小学校以降は、歌遊びの「遊び」の側面を教授法的に活用しつつ、歌遊びの「音楽」的側面に着目するのである。幼小接続期には、歌遊び自体が音楽活動として非常に重視されていることは言うまでもない。「枠組」には「設備条件」という項目があるのだが、その中に「体を動かす、あるいは歌遊びのためにふさわしい広さの空間」（下線は筆者）という記述があることに注目したい。実際に参観した低学年の音楽授業でも、45分の授業の始めに黒板の前や机の列の間のスペースを活用してわらべうたで遊んだり、中間に中庭に出て遊んだりする場面が見られた。「枠組」の「発達目標」（注5、参照）の項目に、以下の文言がある。

[1-4年] 民族音楽の素材と民族的な子どもの遊びを元にした活動には、歌唱、リズムカルな動作、民族舞踊と組み合わせることが可能である。

参観した授業でも「民族的な子どもの遊びを元にした活動」はよく用いられていた。教師は、既知の歌遊びを元に音楽的なねらいを持たせた音楽活動を考案し、子どもは興味や自信をもって取り組んでいた。ハンガリーの保育者・教師は「遊戯的に（játékos）」（英語で playful）教えるという表現をよく用いる。「枠組」は教授法の原則や提案を具体的に示し、教師の創造性の発揮が求められ、推奨されていると言える。

小学校の音楽教育における伝承の歌遊び（わらべうた）の意義は、「発達目標」の中に見出

することができる。まず歌唱（発達目標「1.1 歌唱」）に関して次のような記述がある（下線は筆者）。

- 歌唱に構築される指導の第1段階は、歌う喜びと歌うための正しい習慣の形成であり、その要素として、わかりやすいフレージング、明確なアーティキュレーション、適正な音域がある。
- 歌唱の際に、多くの運動、民族舞踊、自由な動きの即興を伴わせる。正しい姿勢、単純な動きの要素とステップを身に付けるために、わらべうた遊びや民族舞踊は卓越した可能性を提供する。
- 民謡やわらべうたを、生徒はまず最初に耳から覚え、歌の花束（複数を組み合わせて続けて歌う）としても歌わせる。

伝承の歌遊び（わらべうた）は「歌う喜び」をもたらす。その音楽的特徴はまさに「わかりやすいフレージング、明確なアーティキュレーション、適正な音域」である。

次に、読譜（発達目標「1.3 読譜」）に関して次のような記述がある（下線は筆者）。

- 音楽学習初期では、既知旋律の読譜能力が音楽理解の基礎を作る。
- 児童は、既知旋律の読譜の助けを借りて、徐々に音楽現象を記号体系から認識することができるようになる。

学習初期の既知旋律とは、幼稚園での音楽の喜ばしい体験をとおして記憶している豊富な遊び歌の旋律を意味している。ハンガリーでは、低学年で「既知旋律の読譜の助けを借りて、徐々に音楽現象を記号体系から認識する」（傍点は筆者）ことが徹底して教科書に実現されている（尾見 2012）。初期の段階では、記号を音にすることはせず、記憶された音楽現象（遊び歌の旋律）を記号化するのである。これがいかに卓見であるかを強調しておきたい。また、国家標準カリキュラムは「読譜は音楽理解の基礎」であると明言し、読譜教育の必要性と教授原則を示している。

音楽を受容すること（発達目標「2.1 受容能力の向上」）に関して次のような記述がある（下線は筆者）。

芸術的価値のある音楽の受容者となれる生徒とは、耳にする音楽へ注意力を向けることができる者である。まさにそれ故に受容能力のコンピタンスは、ひとつには注意力の形成とその継続的な強化を目指すものである。低学年（1～4学年）の児童は、遊戯的活動を通して没頭する注意力が可能となる。体の動きと音楽的体験の結びつきは、音楽現象を感じさせる、そしてその理解のため、また音楽的能力を深めることへの可能性をもたらす。

幼稚園における伝承の歌遊びは、音楽を耳から集中して聴く体験であり、遊戯的活動そのものである。歌遊びにおいては、言うまでもなく体の動きが音楽的体験と結びついている。そもそも「音楽の受容」は音楽学習の基礎になるものとして重要な理念である。幼稚園における音

乐的喜びに満ちた歌遊びの経験は、まさに「音楽の受容能力」を養っていると言える。このようにハンガリーでは伝承の歌遊びが架け橋となって音楽教育における「幼小接続」が理念と実践の双方で実現されているのである。

3. 音楽教育実践における伝承の歌遊びの意義

本章では、筆者が参観した幼稚園の4-5歳児の音楽指導と、小学校1年生の入学当初の音楽授業の事例をもとに、歌遊びが幼児や児童の音楽的能力の伸長や人間的成長を促すことを具体的に示したい。幼稚園の事例は、幼児の音楽教育の専門家であるディートリヒ・ヘルガ(Dietrich Helga)⁷がブダペスト市内公立幼稚園(チェベレドゥー幼稚園, Cseperedő óvoda)で行っているもので(「音楽幼稚園」⁸)、2014年9月18日とその6か月後の2015年3月13日に参観した(子どもは同一のグループである)。2014年9月の指導については、その全体像を本紀要に報告している(尾見 2015)。小学校の事例は、ブダペスト市内にあるエドヴェシュ・ローランド大学実習小学校(ELTE gyakorló Általános Iskola)の音楽授業で、2014年9月17日に参観した。指導者は学級担任、ヴェニエルチャー・ユディット(Venyercsán Judit)である。

3.1 音楽的能力を伸長する幼稚園の歌遊びの実践

ヘルガの音楽指導は、9月は秋をテーマに、3月は春をテーマに、ほぼ同一の構成で8つの活動から成っていた。ここでは役交代の歌遊びを取り上げる⁹。9月は「クルミの木」の遊びであった。ハンガリー語の歌詞(拍の頭に一致する母音に下線)と日本語の対訳(筆者訳)、旋律(階名)、リズム(1行が4拍、「ソソ」は1拍を2分割するリズムを表す)を示す。

Kiszárad a diófa,	くるみの木が枯れるなら	(ソソ ソソ ソラ ソ)
Nem játszhatunk alatta.	その下で遊べない	(ソソ ソソ ソラ ソ)
Majd megújul tavaszra.	春になったら復活する	(ソソ ソソ ソラ ソ)
Majd játszhatunk alatta.	またその下で遊べる	(ソファ ミレ ドドド)

この歌は1行が4拍で4行から成り、歌詞にストーリー性がある。教師が「クルミの木」役を4人選ぶ。選ばれた子どもが輪の中に入り、手をつないでクルミの木や枝になる。1コーラス歌う間、拍に合わせて枝(高く上げた両手)を揺らす。一方、外側の輪(庭の垣根)になった子どもたちは、1コーラス歌う間、手をつないで時計と反対周りに歩く。1コーラス目が終わ



【1 コーラス目 (写真左)】

輪の中：クルミの木（枝を揺らす）

外側の輪：垣根（手をつないで歩く）



【2 コーラス目 (写真右)】

輪の中：輪の外へ行き，相手を選んで踊る

外側の輪：手拍子で踊りを盛り上げる

図 4-1 役交代の遊び「クルミの木」(4-5 歳児，2014 年 9 月)

ると同時に、「クルミの木」役の子どもがすばやく外側の輪の子どもを一人選ぶ。2 コーラス目は歌いながら二人組で手をつないで回る。一方，選ばれなかった子どもは歌いながら手拍子を打ち，二人組の動きを伴奏する。2 コーラス目が終わると同時に，選ばれた子が輪の中に入って新しいクルミの木になる（役交代）。遊びの1単位が2 コーラスから成っており（図 4-1），これを繰り返す。1 コーラス単位で動きが変わるので，歌の終わりで役が交代しながら遊びが進んでいく。9 月では，相手が選べない内に2 コーラス目が終わってしまうことがあった。

半年後の3月は「アヒル，アヒル」の遊びであった。歌詞と旋律を以下に示す。

Kacs <u>a</u> , kac <u>s</u> a,	アヒル，アヒル	(ソ ラ ソ ミ)
őzveg kac <u>s</u> a,	未亡人のアヒル	(ソ ラ ソ ミ)
Ki a párj <u>át</u> ,	相手を	(ソ ラ ソ ミ)
nem talá <u>lj</u> a, 探しなさい	見つけられない人は	(ソ ラ ソ ミ)
Keressen magá <u>n</u> ak.	自分で探しなさい	(ソファミレドド)

この歌は1行が4拍で5行から成り，歌詞にストーリー性がある。9月から6か月が経過した3月には，子どもたちが積極的にオニ決めをし，歌の終わりですばやく「アヒル」役を選ぶことができていた。「アヒル」は輪の中（池の中）で1 コーラス歌う間，拍に合わせて羽（上腕）を動かす（水浴びをする）。他は「クルミの木」と同じである（図 4-2）。3 月では，歌の終わりを予測し，さっと空間移動ができ，相手をスムーズに選ぶことができていた。歌遊びには類型（タイプ）がある。多くのレパートリーを覚えることができるのは，遊びに類型がある



【1 コーラス目 (写真左)】
輪の中：アヒル（羽を動かす）
外側の輪：池（手をつないで歩く）



【2 コーラス目 (写真右)】
輪の中：輪の外へ行き、相手を選んで踊る
外側の輪：手拍子で踊りを盛り上げる

図4-2 「アヒル、アヒル」で遊ぶ（4-5 歳児，2015 年3月）





からである。逆に、豊富なレパートリーを習得することで遊びの類型が意識化される。レパートリーが増えると既知の遊びに関連付けて、遊び方が自然にわかってくる。そして面白さが増すのである。




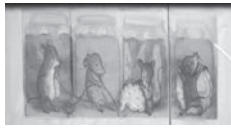
歌詞の韻律がリズムを生み出している。「クルミの木」では各行の4拍目の“diófa”，“alatta”，“tavasza”，“alatta”の脚韻が美しい。「アヒル、アヒル」では“kacsa”（アヒル）の反復が言葉のリズムを生んでいる。歌の形式が明解で「クルミの木」は「AAAB」，「アヒル、アヒル」は「AAAAB」である。いずれも最初のモチーフ（4拍から成るフレーズ）「A」が反復され、対照的な帰結のフレーズ「B」で終わる。つまり、歌の帰結を感じることで「役交代」や動作の転換がスムーズに促されるのである。「B」（ソファミレド）はハンガリーのわらべうたに類出する典型的な終止のモチーフである。旋律の構成音は「ドレミファソラ」の連続する6音で、音域は6度である。「わかりやすいフレージング、明確なアーティキュレーション、適正な音域」（前出、「歌唱」の発達目標）は伝承の歌遊び（わらべうた）の音楽的特徴である。すなわち、歌遊びを唱えたり歌ったりしながら繰り返し遊ぶことを通して、子どもの音楽的能力（拍、リズム、歌唱力、聴取力、動き）が確実に養われ、音楽的母語（図3、④）が形成されていくことは明らかである。

3.2 クラスの人間関係を育む小学校入学時の歌遊びの実践

入学当初の音楽授業は、全員で歌遊びを楽しく遊んで仲間づくりをする。歌遊びは、いろいろな幼稚園から小学校に入学してきた新しい仲間たち同士の人間関係を育むのである。授業は1年生の教室ではなく、机がない小運動場のような教室で行われた。授業は伝承の歌遊びが途切れず続き、一つの活動が2～3分で展開した。40分の授業の分析結果を表1に示す。

表1 小学校入学当初の音楽授業 (ELTE 実習小学校, 授業者は学級担任)

《活動》	《活動の様子》	《活動の流れ》	開始時刻と所要時間／備考
1. 身体で4拍のリズムのエコー		教師が手拍子、膝、肩、胸などで、4拍のリズムを打つ。児童は教師のリズムに注目し、しぐさとリズムを全員で模倣する。	00:45～ 〔2分弱〕 4拍から成るリズムを提示。1拍のリズムは「ター」と「ティティ」「スティ」の3種類。
2. 「お名前なあに？」の役交代		C ₁ :「一人を選んで」「お名前なあに?」 Hogy hív-nak té-ged? C ₂ :「デジュ・ランキです De-zső Rán-ki. 」〔次の子を選んで尋ねる〕	02:30～ 〔1分半〕 問いは4拍の定型、答えは自分の名前を4拍に当てはめて言う。
3. 歌遊び「葉よ、葉よ」		拍に合わせて「両手を上げる・下げる」動きを付けて歌う。(2回)	03:58～ 〔1分弱〕 Forrai: <u>71</u> ♪ Zsipp, zsupp [sm, 4拍×2行] * しぐさ遊び, 1年教科書: p.13
4. 歌遊び「イチ、ニ、サン、シ」		全員でブーツを履くしぐさ。靴底を鳴らして唱えながら歩く。重いブーツを脱ぎ捨てるしぐさ(イメージで動く)。T:「今度は静かに歩きましょう」(強・弱の対比)	4:45～ 〔1分半〕 Forrai: <u>23</u> ♪ Egy, kettő (唱え歌, 4拍×4行)
5. 鬼決め(唱え歌)「バタチョニの木の下に」		子どもが習った唱え歌を挙げていき、3つ目に) C:「バタチョニの…」 T:「それを鬼決めしましょう」 4人、輪の中に入り、門が2つできる。	6:12～ 〔2分強〕 Forrai: <u>23</u> ♪ Batacsonyi 〔唱え歌, 4拍×5行〕
6. 歌遊び「隠れて、緑の木!」		歌の終わりで門を下ろされた子が交代して門になる。3回遊ぶ。再び大きな円になる。	8:30～ 〔2分強〕 Forrai: 152 ♪ Bújj, bújj, zöld ág, [lsfmrd, 4拍×5行] * 隊列, 門くぐり遊び
7. 歌遊び「ヘビが渦を巻いている」		Tが先頭を指示。Tが開始の4拍を歌い出す。2回繰り返し歌って渦を巻き(16拍), 列の最後の子が先頭になって渦をほどく。何を歌うか示さずに始まる。	11:39～ 〔3分強〕 Forrai: <u>109</u> ♪ Tekeredik a kigyó [lsfmrd, 4拍×4行] * 隊列, 渦巻き遊び
8. 鬼決め「エッツ・ペッツ」のあと歌遊び「深い井戸を覗いたら」		鬼決めをして1人、中へ(井戸の中)。歌に続き、一対全員の問答「井戸に落ちた」「誰が引き上げる?」「(誰かを選んで) ○ちゃん!」「何メートルから?」「何回?」「○回!」全員で○回跳ぶ。	12:19～ 〔5分〕 Forrai: <u>14</u> ♪ Ecc, pecc, [4拍×4行] * 唱え歌 Forrai: <u>175</u> ♪ Mély kútba [smrd, 4拍×5行] * しぐさと問答遊び

9. 歌遊び 「隠れて、 行くからね」		T:「ルールを言える子は? 両手は後ろ, オニは「焼けたスコップ」(歌詞)〔※ハンカチ〕をちゃんと手の中に入れるのね。」「のべ7回〕※応援の歓声が起こる。	17:10~〔6分〕 Forrai: [183] ♪ Bújj, bújj, itt megyek [mrd, 4拍×5行] * 鬼ごっこ
10. 歌遊び 「花の冠」		前の遊びで最後のオニが円の中へ(花の冠の役)②歌の終わりで教師が5人指名する。一人に目くばせする。③問答「コツコツ, ノック。私はだあれ?」当たると交代。名前を(まだ名前が分からないときは指さして)答える。	22:17~〔5分〕 Forrai: [100] ♪ Koszorú, [sfmrd, 4拍×4行] 1年教科書: p.25 * 人(の声)当て遊び
11. 私は指揮者(4枚の歌の絵を拍に合わせて指揮棒で指していく)		教師が手本を示し, 子どもは唱えながら拍を手で打つ。教師が指揮者を指名する。T:「指揮者を助けてね」〔※挙手した子を教師が指名〕5回。 * 数え歌(ネコとネズミ)4拍×6行(最後に子どもたちを褒める)	27:27~〔2分半〕 30:00 終了 

凡例: Tは教師, Cは子ども。活動2の子どもの言葉の表記は, 1語を音節に分けてハイフンでつなぎ, 拍に一致する音節の母音にアンダーライン。Forraiはフォライ・カタリン著『幼稚園における歌唱』(1974)に所収の意, 四角囲みの数字は歌の番号, ♪は原題, []内は構成音と歌詞の構成。構成音は階名[d(ド), r(レ), m(ミ), f(ファ), s(ソ), l(ラ)]で示し(ハンガリーでは下行音列で記載される), アンダーラインは終止音。歌詞の構成は, 1行の拍数と行数。*は歌遊びの種類。

11の活動のうち, 8つが歌遊びである。歌遊び以外の活動も, すべて「4拍」のモチーフが一貫している。導入はリズム模倣(エコー)である。子どもは, 教師が身体のあちこちを打つ4拍のリズムを見て模倣する。授業の開始時に集中力を高めている。使われるリズムは「ター」(4分音符), 「ティティ」(8分音符2つ), 「スティ」(8分休符と8分音符)の3種類に限定されている。

互いを名前で呼んで知り合うことが意図された活動が3つある。声に出して名のり, 相手の名前を呼ぶだけでなく, それをみんなが注目して聴くのである。活動2は一对一の問答遊びである。一人選んで名前を尋ねる, 自分の名前を答えることを交代して繰り返す。活動8は, 全員参加の問答遊びである。オニは輪(井戸)の中において, 問答で相手を一人選び, ジャンプする回数も決める。オニと選ばれた子どもは輪の中で手を取り合ってジャンプする。他の子どもたちも全員, 声を合わせて回数を唱えながら一緒にジャンプする。活動10では, オニになった子どもは自分に呼びかける子どもを声で当て, 名前で答える。教師はクラス全員がまだ名前を覚えていない状況に合わせてルールを易しくしている。人当ての人数を5人に限り, その5

人もあらかじめ知ることができ、名前がわからなくても指さして答えることができるように変えている。

歌遊びの配列にも工夫が見られる。始めは大きな動きで体をほぐし、全員が同じしぐさをする（活動3）。次は想像力を働かせるしぐさ遊びで、誰が先頭ということなしに手をつなぐに隊列になって歩く（活動4）。このあと、2人が門を作る「門くぐり」（活動6）、先頭がリーダーになる「渦巻き」の隊列遊び（活動7）、問答を含む複合的な遊び（活動8と10）へと、遊びを発展させていく。活動5以降はすべて、広義の「役交代」の遊びとなり、リーダー（あるいはオニ）が次々と交代し、遊びのルールが複雑になっている。

活動11は「4拍のモチーフ」の意識化という音楽的ねらいをもつ遊戯的な学習である。すでに暗唱している、1行が4拍で8行から成る唱え言葉を、全員が手拍子しながら唱え、教師に指名された1人が指揮者になって、拍に合わせて4枚のネズミの絵を指していくという活動である。「指揮者になる」という設定が子どものモチベーションを高め、4枚の歌の絵が「4拍のモチーフ」の視覚的理解を促している。「音楽学習初期」では「既知旋律の読譜能力」を育てる。「既知旋律の助けを借りて、音楽現象を記号体系から認識することができるようになる」（読譜の発達目標）ための第一歩がこうして始まる（前出、p.76）。

正味30分間の授業の中で、幼稚園で遊びを通して身体に蓄えた拍・リズム・音階・形式の感覚が引き出されていく。小学校の音楽教育は幼稚園教育の土台の上に始まることを、本時の授業は明瞭に示していた。教師は歌遊びの「遊び」の側面を活用し、児童がクラスの共同体の喜びを味わうことを目指す一方、歌遊びの「音楽」的側面に着目し、「歌う喜びと歌うための正しい習慣の形成」（歌唱の発達目標、p.76）を意図していた。教師は、唱え歌を除き、歌遊びの旋律の開始の4拍（モチーフ）を範唱¹⁰する。適切な開始の音高とテンポを児童に示すのである。児童は教師の範唱を聴いて続きを唱和する。歌う前に聴くこと、拍の保持とピッチマッチを意識的に行うことが習慣化されていた。

4. おわりに

ハンガリーのナショナル・カリキュラムが定めている小学校音楽科の発達目標は「音楽の再創造」と「音楽の受容」である（第2章）。歌遊びは身体の動きを通した音楽的体験であり、楽器に拠らず声を合わせ、聴き合うことを促す。幼稚園における音楽的喜びに満ちた歌遊びの経験は、小学校で音楽を「再創造」し「受容」する土台を育てる。第3章では、歌遊びは幼児や児童の音楽的能力を伸長や人間的成長を促すことを具体的に示した。小学校教育の出発点の

授業は、幼稚園教育の総決算が反映されていた。ハンガリーでは、伝承の歌遊びは音楽教育における「幼小接続」の理念と実践の双方を繋いでいる。一方、我が国の幼稚園教育要領は「わらべうた」への言及はなく、小学校指導要領は共通教材でわらべうたをわずかに扱うものの、その音楽教育的価値への言及は乏しい。本研究で得られた知見を広く我が国の音楽教育に生かす方途を探ることを今後の課題としたい。

最後に、学期初めにも関わらず快く参観させて下さった Dietrich Helga と Venyercsán Judit の両氏に心から感謝申し上げたい。

(本研究はJSPS 科研費 26381225 の助成を受けた。)

注

1. このような教育内容の系統性の原則に従いつつ、実際の教科書における教材の配置は単線的・直線的ではなく、児童・生徒の興味や理解にかなうよう、螺旋的な構造になっている。
2. ハンガリーの就学前の保育・教育は、生後 20 か月から 3 歳までは福祉機関である保育園 (Börcsöde)、3-6 歳が教育機関である幼稚園 (óvoda) でそれぞれ行われている。就学前 1 年間は小学校への就学に備え、最低 1 日 4 時間、幼稚園への通園義務がある。2015 年 9 月から義務教育が 3 歳からとなったが、家庭保育の状況に応じた免除規定があり、現状は「幼稚園最終年次の 5 歳児は 1 日 4 時間の義務教育」となっている (外務省データ、および 2016 年 8 月の現地での専門家への聞き取りに基づく)。
3. 12 年制の学校教育は 4 年ごとに区切られ、1-4 学年と 5-8 学年が基礎学校 (Általános iskola)、9-12 学年が普通中等学校 (Gimnázium) や職業中等学校である。1-4 学年は学級担任制で、5-8 年は教科担任制である。
4. ハンガリーは日本と同じく姓・名の順であり、本稿ではこれに従う。コダーイとバルトーク (Bartók Bála, 1881-1945) は、真のハンガリー民謡を「発見」した作曲家と言われる。コダーイは「マジャル精神を完全に体现する音楽を書いた作曲家」とバルトークに評されるように、民謡をもとにおびただしい音楽作品、教育作品を遺した。マジャル人 (ハンガリー人の自称) はフィン・ウラル語族に属し、9 世紀にカルパチア盆地に移動して建国の地とした。ヨーロッパの同じキリスト教国であっても、言語的、民族的、伝統音楽的に、ゲルマンやスラブとの違いがある。オーストリア=ハンガリー二重帝国の時代、ジプシー楽団の奏でる音楽はハンガリーの伝統であると国の内外で信じられていた。コダーイは子ども時代に本当のハンガリー民謡・芸術音楽・キリスト教の合唱音楽の豊かな経験があり、大学の哲学科と王立音楽院の作曲科で同時に学んだという才能に恵まれ、1906 年に博士論文「ハンガリーにおける民謡の韻律法の節構造」で博士号を取得している。そのため、ドイツ音楽を規範とする当時の音楽界に身をおきながら、重い蠟官を運んで農村に出かけ、ハンガリー民謡の採集に精力を注ぎ、ハンガリー民族音楽学研究所の礎を築いた。リスト音楽院で教えつつ、ドイツのレパートリーを主とする、器楽中心の音楽院のカリキュラムに疑問を持ち、「ヨーロッパとハンガリーの双方の伝統を融合する」べきだと考えた。その後、1925 年にブダの丘で聴いた、師範学校的女子生徒たちの歌とその歌声に大いに疑問を抱き、学校の音楽教育の改革に着手したという (横井 1998: 259-269 より)。
5. 音楽科の発達目標 (tantárgy fejlesztési céljai) は、音楽科においては、「1. 音楽の再創造」と「2. 音楽

- の受容」で構成されている。その下位項目は「1.1 歌唱」「1.2 生成的（個人および／またはグループで作り上げる）・創造的音楽活動」「1.3 音を識別して楽譜を読むこと（読譜）」「2.1 受容能力の向上」「2.2 音楽鑑賞」となっている。
6. 音楽科は芸術教科領域の一つである。Nat は、1-12 年の教科領域を、ハンガリー語と文学、外国語、数学、人間と社会、人間と自然、私たちの国と環境、芸術、情報科、生活管理と練習、身体教育とスポーツ、と定めている。芸術教科領域は、音楽、演劇と舞踊、視覚文化、映画文化とメディア学、から成る。音楽の授業は、1-4 年は必修で週 2 時間、5-8 年は必修で週 1 時間、9-10 年が必修で週 1 時間である。
 7. コダーイの弟子、フォライ・カタリン（Forrai Katalin）はコダーイの音楽教育哲学を就学前教育に具現化し、『幼稚園の音楽（Ének az Óvodában）』（1974）を著した。ディートリヒ・ヘルガはフォライの薫陶を受けて、その跡を継いで ELTE 小学校・幼稚園教員養成学部で教鞭をとり、国内外の幼児音楽教育に貢献した。
 8. 9 月から 6 月までの 1 年間、午前中の保育時間内に開設され、1 回 40 分の音楽指導が週 1 回行われている。親の意思で参加を希望する子どものみだが、ほとんどが参加し、人数は、4～5 歳児が約 20 名であった。
 9. 各回の音楽指導の構成は、9 月当初は、①挨拶の言葉でエコー ②歌遊びの旋律を歌う ③唱え歌の拍とリズムを楽器で打つ ④歌遊び「クルミの木」（役交代の遊び）⑤言葉の即興的創作 ⑥歌のリズムを打つ ⑦歌遊び「ピロードのすみれ」（役交代の遊び）⑧歌の即興的創作であった。6 か月後の翌年 3 月は、①挨拶の言葉でエコー ②旋律の高さを空間に表す ③唱え歌を唱えて歩く ④言葉の即興的創作 ⑤歌遊びの導入 ⑥歌遊び「アヒルが水浴び」（役交代の遊び）⑦歌遊び「チューリップ」（役交代の遊び）⑧歌の即興的創作 であった。各回到役交代の歌遊びが 2 つ、含まれていた。
 10. 参観当日は、担任教師が喉を傷めていたため、民族ダンスの教師が範唱を代行していた。

文 献

- 小川昌文・尾見敦子・永岡都・阿波裕子・井下べに・Arison M. Reynolds, 2015, 「世界の音楽科学習指導要領を比較する—アメリカ・ハンガリー・フィンランド・ドイツでは音楽教育をどう考えているのか—」『音楽教育学』45-2, pp.54-58.
- 尾見敦子, 2012, 「なぜ音楽の授業で読譜力が養われないのか—ハンガリーの音楽教科書が語るもの—」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.9 no.2, pp.56-66.
- 尾見敦子, 2015, 「諸外国に見る音楽教育における『幼小接続』—フィンランドとハンガリーの事例から—」『川村学園女子大学研究紀要』26 巻 2 号, pp.43-62.
- 高橋美智子「音楽はみんなのために—その原点—」（日本コダーイ協会全国大会における基調講演（2014 年 8 月 9 日、甲南女子大学）（表 1 は未公開、配布資料に基づき高橋が改訂）
- 横井雅子, 1998, 『音楽でめぐる中央ヨーロッパ』, 三省堂.
- Forrai, Katalin (1974), *Enek az óvodában* (幼稚園における歌唱), Editio Musica Budapest.
- Az óvodai nevelés országos alapprogramja (幼稚園教育の国家基準プログラム) (2012) http://net.jogtar.hu/jr/gen/hjegy_doc.cgi?docid=A1200363.KOR (2016 年 9 月 10 日閲覧)
- Kerettanterv az általános iskola 1-4. évfolyamára (カリキュラムの枠組 一般小学校 1-4 年) (2012) http://kerettanterv.ofi.hu/01_melleklet_14/index_alt_isk_also.html (2016 年 9 月 12 日閲覧)
- Nemzeti alaptanterv (国家基準カリキュラム) (2012) http://ofi.hu/sites/default/files/attachments/mk_nat_20121.pdf (2016 年 9 月 12 日閲覧)